

教会暦と聖書の流れ

教会の古い伝統に基づいて、毎年9月14日に「十字架称賛」の祝日が祝われます。日曜日はいつも「主の日」ですから、聖人の祝日が日曜日に重なった場合は、主日のほうが優先されます。しかし、「十字架称賛」のような「主の祝日」(キリストご自身を祝う祝日)は日曜日に当たるとその祝日のほうが優先して祝われることとなります。

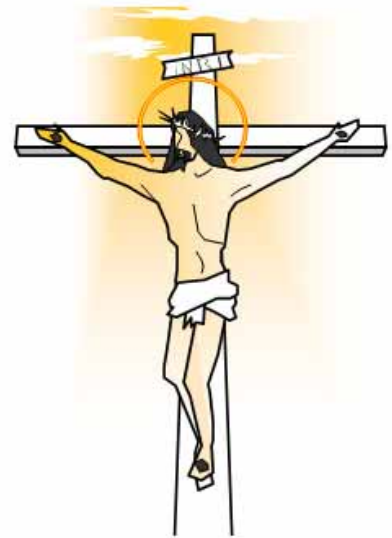
福音のヒント

(1) ヨハネ3章1節から始まったイエスとニコデモとの対話の中で語られる言葉です。ただし、3章16-21節はイエスの言葉というよりも、福音記者ヨハネの言葉と考えることもできます(聖書のギリシア語本文には「 」のようなしるしはありません)。

ニコデモには「新たに生まれる」(3,7節)というイエスの言葉が理解できませんでした。この「新たに」はギリシア語では「another(アノーテン)」という言葉で、「新しく」という意味の他に「上から」という意味もあります。イエスは「上から、すなわち神から生まれること」について語っているのに、ニコデモのほうは「もう一度母親の胎内に入って生まれる」ことだと思っているので、話がかみ合わないのです。自分の努力で一生懸命律法を守ることによっていのちが得られると考えたファリサイ派のニコデモには、イエスが語られる「神からのいのち、神の霊によって生かされるいのち」が理解できなかったようです。

このすれ違いの中で「わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう」(12節)と言われ、きょうの箇所が続きます。

(2) 「天から降(くだ)って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上(のぼ)った者はだれもない」(13節)の「人の子」はもちろんイエスご自身のことです。そして、この言葉は続く14節の「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない」とつながっています。「モーセが荒れ野で蛇を上げた」話は民数記21章4-9節にあります。紀元前13世紀、モーセに率いられてエジプトを脱出したイスラエルの民は、荒れ野の厳しい生活に耐え切れず、神とモーセに不平を言いました。その時、「炎の蛇」が民を噛み、多くの死者が出て、民はようやく回心しました。「主はモーセに言われた。『あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る。』」モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た」(21章8-9節)。



古代の人々にとって、蛇は不思議な力を持つ存在で、人間を害するもの = 罪や悪のシンボルでもありましたが、同時に、いやしと救いのシンボルにもなりました。この二面性が十字架の二面性とも通じるのでしょうか。十字架もまた、のろいと死のシンボルでしたが、キリスト者にとっては救いといのちのシンボルになったからです。

(3) とにかく、ヨハネ3章14節の「上げられる」は、直接には十字架の木の上に上げられることを意味していますが、実は、そこに「天に上げられる」というイメージが重なっています。ここにヨハネ福音書の一つの特徴があります。ヨハネは受難の物語を始めるに当たって、こう言います。「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」(13章1節)。ヨハネにとって十字架の時は、イエスが「父のもとへ移る御自分の時」です。なぜなら、ヨハネは十字架のイエスの中に「愛の極限の姿」を見ているからです。「この上なく」と訳されたギリシア語の「エイス・テロスeis telos」には、「(時間的に)最後まで」という意味と「(限度として)この上なく」という意味の両方があります。ヨハネがイエスの十字架の中に見ているのは、この「極限までの愛」なのです。そして、ヨハネにとって「神は愛」(ヨハネの第一の手紙4章7節)であり、だからこそ、十字架は、イエスが「愛である神」と完全に一つになる時なのです。ですから、十字架は挫折ではなく、栄光の時であり、ヨハネ福音書では「十字架に上げられる」ことと「天に上げられる(神のもとに行く)」ことが一つのことになっていると言えるのです。

(4) 次に、14節から16節をよく見てみましょう。

14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。

15 それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

16a 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

16b 独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

このように並べてみると、15節と16節bはほとんど同じことを言っているのに気づきます。だとしたら、14節と16節aも同じことを言っているのではないかと考えられます。つまり、「独り子をお与えになった」ということには、ただ「イエスを世に遣わした」というだけではなく、「十字架の死に至るまで与えつくした」という意味のあることが分かります。ヨハネはそこに神の愛の最高の表れを見るのです。

(5) 17節の「裁く」の意味は、この箇所では「裁判をする、判断をくだす」ではなく、「断罪する、罪に定める」です。そして、イエスの到来が人々の救いのためであったことが強調されます。もちろん、この日の朗読でこの節まで読むのは、十字架にこそ人々の救いがあるということを強調するためです。このように、十字架の中に神の愛と救いの最高の表れを見る、というのがきょうの福音のメッセージです。わたしたちはそのメッセージをどのように受け取り、それにどのように答えることができるのでしょうか。